



平和文化研究 第38集 (2017年度)

8月9日 ボックスカーの見た長崎

～米軍が撮影した長崎原爆記録映像～

研究発表・鼎談

大矢正人 (長崎総合科学大学名誉教授)

奥野正太郎 (長崎原爆資料館学芸員)

ブライアン・F・バークガフニ長崎総合科学大学附属図書館長)

質疑応答

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

8月9日 ボックスカーの見た長崎

～米軍が撮影した長崎原爆記録映像～

研究発表・鼎談

大矢正人（長崎総合科学大学名誉教授）

奥野正太郎（長崎原爆資料館学芸員）

ブライアン・F・バークガフニ

（長崎総合科学大学附属図書館長）

質疑応答

2016年11月5日(土)

長崎総合科学大学201講義室（17号館2F）

主催 長崎平和文化研究所

長崎総合科学大学附属図書館

バークガフニ：大矢さん、奥野さん、大変素晴らしい発表をしていただきました。私も個人的に自分の名前が出てびっくりしたんですが、私自身の研究にも重なるところもあって、資料というのはまだまだ全部は掘り起こされていないという印象が大変強くありました。動画や画像の分析もまだ十分に行われていない作業で、本校の学生も取り組んでいるのは大変素晴らしいことだと思います。

私は平和が大好きなカナダ出身ですので、今日は平和という観点で、国際理解というところに重点を置きたいと思います。鼎談ということですがまずよろしければ、先ほどの2つのプレゼンテーションに対して皆さんのご質問がありましたら、挙手して発表者に質問していただきたいと思いますがいかがでしょうか。何かご質問はありませんでしょうか。はいどうぞ。

質問者 A：私はメリーランド州に公文書館ができる前の、ワシントンの公文書館に自費で物を探しに行ったんです。そこに行ったら分類が全く大まかで、結局日本の原爆に関しても「アジア太平洋戦争」というものなんです。引き出しに色々な

物が入ってしまっていて、一番びっくりしたのは、昔あった ABCC に関係した人とか、海兵隊の軍人たちで医者だった人たちだと思うんですが、カルテなど自分が関連したのを持ち帰って、「核兵器の攻撃を受けた長崎でこのような病人がいて、どのような治療をしている」と、もし何かの役に立つかもしれないからとアメリカが売りに出しているんです。その売りに出した記事を集めて、新聞の切り抜き、雑誌の切り抜き、あるいは広告の切り抜きなどをいっぱい集めた箱もありました。だからいかに米国が原爆を落とした後の症状や治療法や効果について、漏らさずに収集をしようとしていたかがわかりました。私はその時に、今度きちんとしたものがメリーランド州にできるそうだからと、奥野さんがおっしゃったように全部手で1枚ずつ探しました。それはお金を先にペイして、一生懸命探さなきゃいけないでしょ、なくなる前に。私がワシントンで知り合いになった人で ICU の学生の時に卒論で原爆裁判を書いた人が、内務省にキャリアに入って嫌になって辞めてアメリカに行って、結局国務省に出入りする婚約者の人と知り合いになりまして、その人と一緒に行ってそういう物を探したんですが、雑多な資料があったんですが、持ち出している。だからそういう物が今残っているかどうかですね。誰それがこういう資料を持っているから、医学的な価値とかコマーシャルな価値があるかもしれないから「必要な人は自分まで連絡をしてほしい」という広告の紙もありました。こういう状況なので、また探しに行ってみられたらいいと思います。私が行ったのは 1993 年です。

バークガフニ：私も一度長崎の原爆、というより長崎の戦前戦後のさまざまな人たちの動向について調べたんですが、同じような感想がありました。あまりよく整理していないし資料を探し出すのも非常に難しい。それに比べて英国のロンドンの公文書館の方が検索も簡単にできて非常に調べやすいです。アメリカは見つけにくいし手続きが厄介

ですね。その辺りはどうでしょうか。

奥野：私も仕事柄色々な方からお話を聞きます。マスコミの方がかなりお金をかけて色々な公文書館を漁ってそれでも見つからないと。先ほど言われた ABCC 関係のものであれば「テキサス大学の方にある」と、「ワシントン D.C. に行ってもありませんよ」と言われたこともあります。どこに何があるというのはまだまだネットが整備されていないというところが非常に多いです。マリンはマリン、アーミーはアーミーというようにセクショナルリズムといいますか、陸軍は陸軍が保管、海軍は海軍が保管して、それがそれぞれ独自のミュージアムやアーカイブを持っていて、それとは別に公文書館もある。となるとやはり私たちがやってきた調査は氷山の一角だなと感じます。それでもあれだけの資料が集まって、私たちもなかなか手に負えていないところがありますので、まずはどんどん数をこなしていく、それをどんどん積み重ねていくしかないのかなと思っています。

質問者 A：私はスミソニアンズのチェアマンの Dr. クラウチが前もってどこにどのような物があるか下調べをしてくれて館長に紹介してくれたので、比較的直接そこに行きやすくて、雑多な整理してない資料にある程度目を通せたんです。

バークガフニ：なにか他にご質問、コメントはありませんでしょうか。今クラウチさんのお名前が出ましたが実は私も面識がありまして、1995年の原爆50周年の時にスミソニアンで原爆展というのが計画されたんですが、結局それは実現しなかったんですね。その時のスミソニアンと長崎市、特に本島市長とのやり取りの中で通訳をさせていただいて感じたことは、まさに今日のテーマに近いもので、結局日本とアメリカの見方の違い。やはりアメリカ人は上から見ていて地面で何が起こったのかを知らない、というより見ようとしないう傾向があります。例えば原爆展の時に長崎市に15点の資料を貸してほしいと、スミソニアンズの館長と

企画部長のクラウチさんも長崎に来られたんですね。本島市長が貸す約束をしたんですが、結局それらはアメリカで「あまりにも生々しすぎる」ということで拒否されます。子どもの血だらけの衣服やロザリオ、こういった物が感情的なものになるんじゃないかということで、大変残念なことです。とうとう歴史的展示会になるはずだった展示会が中止になってしまいました。その後アメリカで記念切手が発行されましたが、その記念切手は戦後「原爆が戦争の終結を早めた」というタイトルで、やはりキノコ雲、上から見たものです。この見方の違いがあつて、なかなか調和というか、お互いに理解し合うのに未だに至っていないような気がします。大矢先生は今日動画をご覧になって、この辺りをどのようにお考えですか。

大矢：最近見た新聞記事の中で、原爆投下当時のアメリカ大統領トルーマンの孫が日本の被爆者と交流を持っているという記事がありました。原爆投下についての謝罪や責任を問うということを経ずに脇に置いて、「原爆投下によってどういうことが起こったのか」「それぞれの国の指導者がどういう決断をしたのか」「その時それぞれの国の国民はどういう考えだったのか」という事実をお互いに共有することの大切さが指摘されていました。国家というレベルではなくて、人間同士の心の通い合いの大切さが述べられていました。今日、それが必要なのではないかと思います。日本人がやったから、アメリカ人がやったから、ということではなくて、秋月辰一郎さんが言う「科学化」ですね。原爆投下の問題を取り組んで、事実はどういうことだったのか、どういうことが起こったのか、ということをお互いが確認する。当時の政治状況、国民の意識についても共同で研究する。国家間の立場にとらわれないで、今日までそれぞれの国で蓄積された原爆投下に関する研究成果をもとにして、「対話」を進める。そこに今の時代の課題があるのではないかと思います。まずは「対話」から始めることが大切で、研究の蓄積をもと

にして従来から一般的に言われている考え方をもう一度考え直してみることも必要ではないかと思えます。その場合に、原爆被害の写真や映像、被爆証言などの資料が大変重要な役割を持つと考えています。

パークガフニ：奥野さんいかがですか。

奥野：難しい問題だと思います。私も被爆者の方と何度もお話をさせていただきますし、聞き取りや資料の寄贈の話の時には、弟さんや妹さんといったご自分の近い方を自分の手で茶毘に付してきたという経験を聞きます。個人的にお話をお聞きしている時にはそのような悲惨な出来事を起こしたのに対して、そのようなことをした人間というのに対して、それは当然アメリカがということにはなりません。それらについて被爆者の方がお持ちの感情は少しでもわかりたいと思えますし、そういう気持ちで寄贈や聞き取りをさせていただいているので、感情的な部分にちょっと流されてしまうことは、やはりあります。逆にそういう部分が全くないとそれはそれで良くないとも思えます。悲しみや痛みといった部分に寄り添えるように、少しでも思いを見出せるように知識も身につけていきたい。ただその反面それをずっとやっていって何か生産性のあることにつなげられるかという、やはり先ほど言われたように科学的な部分に注力しなければいけないところもあります。ですからこれは本当に、答えの出ない部分だと思います。聞き取りをしている最中に悲しみや痛みというものに気持ちが打ちひしがれるような部分がありますし、それがないと原爆資料館足りえないのかなと感じているところなので。ただ被爆体験のない世代が今後どのように語りをしていくかという、そういう「語る」という面では科学というのは有効な手だと思いますので、そこは少し切り分けて考えていきたいと思っています。

パークガフニ：皆様の方で何かご質問ありませんでしょうか。

質問者 A：日本人はどんな家庭でも大体新聞を取っていますよね。だから特別に原爆のことに関心がなくても記事で見ます。ところがアメリカでは新聞を取るというのはよっぽどステータスが上の家庭じゃないと、新聞を毎日取っているような人は割と少なく興味のある時に買いに行くという感じなので、私たちが新聞を見てアメリカの大統領選挙を知っているような程度に、アメリカの人は日本の安倍首相なんて知らないわけですよね。日本が安全保障法案でアメリカと一緒にどこまでも戦争をしに行くような状況になっているようなこともおそらく専門家以外にはアメリカの人たちは知らない人が多いんじゃないかと思うので、伝え方っていうのを被爆者が体験を聞いて伝えるっていうことからもう少し何かこう、別の角度から理性的に、かつエモーショナルに伝えるのを広げるっていうのを被爆者だけに頼らないでしないといけないと思います。日本の国内でも伝えるというのは大変だから、まして核兵器保有国に伝えるのは大変ではないかと思えます。私はアメリカの人たちと喋っていてその人たちは皆グッドアメリカンですけども、核兵器のことになったらお互いに陰湿な空気になるというのはありますので、そこが一番の問題じゃないかと思っています。

パークガフニ：他にご質問、ご意見はありませんでしょうか。どうぞお願いします。

質問者 B：私は長崎市で50年ほど被爆者の撮影を続けているカメラマンです。今日大矢先生のお話と奥野さんのお話を聞いたわけですが、原爆がどういう形で落とされたのか、まだほとんどの被爆者は詳しくは知らないというのはあるわけですね。それから原爆と直接関わりがあって生きていた方。私が会う被爆者は被爆史ですね、苦しみながら70年間を生き抜いてきた、あるいは命が絶えて亡くなってきた方。しかしおそらく10年も経てば被爆者のほとんどの方が亡くなってしまうんじゃないかと。こういう気持ちは今私が向き合っている被

爆者の方々はやはり真剣に考えていらっしゃると思います。そういうなかで今必要なことは「原爆はなぜ落とされなくてはいけなかったのか」、この点についての真相。それから「被爆者がどう生きてきたのか」。その生きてきたなかで核兵器廃絶を求めていくという、そういう気持ちが強くなってきている。この点は非常に大事な問題ではないかと思うし、私たちが共有しなくてはいけない部分があるのではないかと考えています。私自身も50年間の仕事の整理に今入ろうとしているんですけど、それでもまだ記録しなくてはいけない部分が残っているし、現実にも今生きている姿というのを残してほしいという被爆者の希望もあるわけです。そういった点で「今私たちは何を考えたらいいんだろう」という、その点を今日この集まりをお訪ねして、色んな角度から原爆の問題を見つめることができたのは非常に助かりました。ありがとうございました。

バークガフニ：ありがとうございました。他にありませんでしょうか。

質問者C：行政に直接タッチしておられるのは奥野さんですが、行政の見方というのは日本もアメリカもよく似ていると思うことがあります。今年5月27日にオバマさんが広島に来ましたよね。あの時に所感という感想を述べられましたが、冒頭の言葉が「71年前雲一つない明るい朝、死が空から落ちてきて世界が変わった」(“Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed.”)。「落ちて」としか言わないですよね。僕はこれは自動詞の原爆感だと思うんです、彼は「落ちてきて」って言ったんですね。アメリカの大統領がそんな風に自動詞でしか語らないという原爆観から原爆投下は誤りだったということは出ようがないんですよね。自分で勝手に落ちてきたんだと。長崎はどうか。これもまた困ったことに、僕は「困ったことに」と思うんですが、爆心地公園の6m数十cmのあの柱の後ろに

横に長い低い塀があってそこに1枚の銅板のプレートが挟まっていますよね。漢字9文字で「原子爆弾落下中心地」と書いてあります。やっぱりここも落ちるとしか書いてないんです。このままの表現だったらどうしても僕には自然現象のように感じるんですね。秋になって木の葉は落ちるかもしれないけれど原爆が勝手に落ちるということはないわけで、そういう表現は未だに被爆地でもアメリカのトップの言葉の中でも慎重に、さりげなく「落とす」という他動詞は避けるという配慮がなされているのかもしれませんが、やはり長崎市には「これは自然現象じゃない」と子どもにもわかるような名前の付け方を私はしてほしいと思っています。修学旅行の子どもたちに今の9文字を宿題で、「一文字だけ違和感がある」と話すと後で感想文がどさっときて、やはり「あなたが言ったのは『落』という漢字ですか」と、ちゃんと指摘するんですね。そしてその後に「投」という字、「ここは『原子爆弾投下中心地』だとした方が良い」という意見に私も賛成です」という子どもたちの感覚はまことに真つ当だと私は思ってるんですけども。もし奥野さん、コメントがあればと思います。

バークガフニ：はい、大変貴重なご意見ありがとうございました。奥野さんお願いします。

奥野：はい。なかなか難しい部分というか、難しいなと思います。その通りなんだろうと思います。個人的にどう思うかという部分はありますが、やはり長崎市役所が今までやってきたこと、組織としてこういう風に今までやってきたことが、やはり難しい部分に当たるところはあります。個人的に「私はこう思います」とここで言うこと自体がどうなのかというところがありますので、ここは少しコメントは差し控えさせていただければと思います、すみません。

質問者A：奥野さん、Epicenterとアメリカでは言ってる。落下中心地じゃなくて。

バークガフニ：英語のEpicenterというのは地震用語ですね、地面の下の中心地。Hypocenterが正しい

言い方ですね。

これについては個人的な思いですが、今現在の長崎原爆資料館の前に四角い大きな建物があつたんですが、その中に長崎国際文化会館という名前で、私が囑託で、30年以上も前の話ですが、そこに勤めている時に出口にノートが置いてあつたんです。そのノートというのは自由に落書きでも、無記名でも、感想を書いていいということで、日本人用に「どうぞ自由に書いてください」と日本語で書かれたノートと、英語で”Please feel free to write your impression.”と書かれたノートがありました。それを見ると、今になってそれをコピーすれば良かったなと思うんですが、その中身というのは対照的なものです。日本の多くの修学旅行生とかが書いているんですけど「アメリカ死ね」とか「馬鹿野郎」とか、このような落書きが多いんですね。今度は英語のノートを見ると「お前ら真珠湾攻撃を忘れたか」とか、そういったコメントがずらっと並んでいるんですね。この全くの隔たり、どうにもならない意見の偏りというのは、どうやってこれを縮めるのか、どうやってそこに橋を作るのか、その後もずっと考えてきたことですが、これが一番重要なポイントじゃないかと思います。

「謝罪」という言葉がありますが、お互いに謝罪しなければ成り立たないと思うんですね。それをどうコミュニケーションの橋を作っていくのが、特に若い皆さんの大きな課題だと思います。もう一人の方が挙手をされていますのでマイクをお渡しします。

質問者 D： 皆さんこんにちは。私は昭和 20 年 8 月 9 日 11 時 2 分は運命の時間だと思っているんです。私は長崎市立西坂国民学校の 3 年生でした。3 年生の時に今の場所で瓦礫の下敷きになって放射線をくぐらずに生き延びたからこんなに元気になっています。さっきから原爆の投下の云々って皆さん言っていますけれども、なぜ原爆が落とされたかは大本営の軍令部が海外の野戦の駐屯地に対して

「日本の軍是一片たりとも残さず交戦をする」という外電を各キャンプに出しているんですね。それが米軍の連合軍の指令部にいつて、それで戻ってきたのがその原爆が落ちたのと、日本が公電で外国の高官から大本営に入ったのとズレがあるんですよ。そのズレがいわゆる逃げ口上になっていると。アメリカはなぜ資料を海外に出したくないかということ、アメリカの国防総省であるペンタゴンに全部原子爆弾の資料を持って帰っているんです、絶対公表しないということです。それを国家対国家の交渉で資料を出してもらわないという語り部はできません。そこまでです。

パークガフニ： はい、ありがとうございます。また貴重なご意見をいただきました。大矢さん。

大矢： 今の話とも絡むのですが、核兵器の問題を今どう考えるのが大切です。この間の国連の動きを見ていますと、今までは核兵器というのは国家の安全保障の問題という位置づけだったわけですが、現在は人間の問題として核兵器を捉えるという面が強くなっています。長崎の被爆者は以前からずっと主張していたわけですが、核兵器の非人道性という面から捉えるというのが、国際政治の非常に大きな流れになっています。これまでの被爆者運動が大きな力となって、オーストリアやメキシコなど多くの国々を動かし、123か国の国々が核兵器禁止条約を求める動き（10月27日、国連第一委員会）になってきています。国家安全保障の問題から人間の問題に視点が移っているのです。先ほどのトルーマンの孫と被爆者の交流も人間の視点を基本にしています。そもそも国家は何のためにあるのか、それは個々の人間のためにあるわけで、国家のパワーバランスを中心に考える流れがある一方で、国際政治の場でも人間を中心に考える、個人の尊厳を大切にしていくという大きな流れも起こっているわけです。核兵器は被爆者に非人道的な事態をつくりだし、現在もつくりだしていることを改めて考え、広げていくことが非常に重要な課題になっています。原爆開発当時、ア

アメリカの科学者の中でも、フランク報告で示されるように、あのような形で原爆投下に反対した科学者が多くいたわけです。アメリカが原爆を投下することによって、戦後のアメリカの名誉、威信はなくなるのだ、こういうことをするとアメリカにとってもマイナスになるということを訴えていた科学者もいました。今日、国際政治の場で核兵器の非人道性という視点を持って、核兵器の禁止・廃絶を主張する流れが大きくなってきていますので、被爆地長崎の市民の役割がますます大きくなっていると考えています。

奥野：私は専門として原爆資料を扱うということで雇われております。歴史を今までやってきて、専門と言えるようなところによりやく差し掛かってきたぐらいのまだまだ未熟な者ですが、もうすぐそこに被爆者の方が話すことのできない世代が近づいてきている危機感があります。そのなかで原爆資料館がこうあらなきゃいけない、もしくは原爆資料館の学芸員はこういなきゃいけないという理想というのは色々な方から色々な方向でいただきます。やはり重たいなと思うことも多々あるんですけど、ただそれだけ期待されているという事実も重く受け止めています。今から何をやっていくのかという意味では今まで、先ほどもあったような核兵器の非人道性の問題もありますが、それもやはり資料からコツコツ科学をやっていかなければ論証できない問題でもある。そういう意味では私たちの一つ一つの小さな研究や調査が裏付けになっていくと信じてやっていくしかないと感じています。以上です。

質問者E：大矢先生の発表の中で、どの飛行機か特定はまだできていないということですが、どこをどのように飛んで原爆を投下してどう逃げたか、そういう解明をもっともっと早くしてもらいたい。僕たち被爆者は平均が80代だから早くお願いしたいと思います。写真収集もちびちびやっていると私たちは間に合わないのではと

てもらいたい。僕は被爆を語っていますが、本校でも一度語らせてもらったことがあります。かなりの人が寝ていました。だから淡々と語ってもまずいのか、どう語ったら皆が居眠りしないのかいうことを今僕は考えています。それにはやはり感情の面も必要だし、科学的な面も必要なんですね。それが相まって今いかにして、二世三世も含めて若い世代に伝えていくかが僕の今の関心です。やがて私たち被爆者はいなくなるので、被爆者以外にどのように継承してもらおうかというのが大きな課題になっていますが、本校でもまた被爆者を呼んで色々語らせてもらいたい。こういう催しをするんだったらやはりまた被爆者がどう語っているか、それをどのように若い人たちは受け継いでいくのか、そういう催しをしてもらいたい。僕たち被爆者もまもなくこの世から消えるので、僕たちも頑張っていきますけれども、皆も頑張らなければいけない時代、転換期に差し掛かっていると思います。以上です。

パークガフニ：それではもう時間が迫ってまいりました。まとめというのは難しいですが、今最後のご発言その通りだと思います。今日2人の先生の発表だけでいくつかのキーワードが浮かび上がったと思います。一つは「資料」。まだまだ原爆に関するもの、そして原爆に関わった人々に関する資料がまだまだ海外にも日本にも眠っている所が多い。それを掘り起こしていく作業をこれからも続けなければならないと思いました。

もう一つのキーワードで「科学」という言葉、これも大いに賛成するところです。科学というのはつまり史実を解明する、客観的に分析していくということがやはり大切です。科学的に分析することはいわば普遍的、世界中の人が認める説得力があるということで、それが例えば、動画をGoogle Earthという新しい技術を使って分析し解明していく。このことは大矢先生がおっしゃったように長崎には非常に大きな役割がありますので、

私たちが特に力を入れないといけないと思います。

もう一つ大変印象に残ったキーワードとして「人間」。やはりこれは人間が原爆を落とした、人間が被害を受けた。そのことを語り合って二度と間違いを犯さないために、やはり私たちがFace To Faceで、人間同士で語り合って情報交換をしていく。そうすれば核兵器のない世界、戦争のいらない世界が見えてくるのではないかと、今日感じました。

今日は色々な貴重な意見が出まして、また皆様からもご意見を聞かせていただきまして、本当にありがとうございました。それでは上菌先生にマイクを渡します。

上菌：3人の皆様どうもありがとうございました。そしてご参加の皆様、どうもありがとうございました。

皆様から出された課題が非常に大きくて、色々あるなと思いました。今日はこの3人の方々に対してという形で今は話をさせていただきましたが、それは長崎総合科学大学の長崎平和文化研究所に向けられた課題でもあると思いながら聞いておりました。今日のこのシンポジウムの様子はテープ起こしをしまして、来年度の長崎平和文化研究所の紀要という形にして出させていただきます。ちょっと先になりますが楽しみにお待ちしております。ありがたいと思います。

今長崎平和文化研究所のやっていることのひとつは「子どもの平和」です。平和には、「子どもにとっての平和」が含まれるのではないかという、少し平和概念を広げたところを扱おうと考えています。

今日の集まりでは、私としては地味かなと思いつながら、科学研究というものを取り上げた、長崎平和文化研究所がいわば自分たちの中でやってきた研究を取り上げたことに対して、これだけの方にお集まりいただいたことに心から感謝申し上げます。今後とも長崎平和文化研究所をよろしくお

願いいたします。どうも本日はありがとうございました。

最後に、うちの附属高校を定点観測という形でずっと、どういう平和意識を持っているかを毎年調べています。定点観測である程度の意識の動きがわかります。会場の後ろに置いてありますのでよろしかったらお持ち帰りください。

それから大矢先生がお話になられたのは実は分厚い科研報告のごく一部でして、科学研究というものの全体を知ろうという方は科研の報告書も置いてありますのでどうぞお持ち帰りください。

ありがとうございました。



1945年8月9日 ボックスカーの見た長崎 ～米軍が撮影した長崎原爆記録映像～

研究発表・鼎談

大矢正人 × 奥野正太郎 × ブライアン・F・パークガフニ



大矢正人氏
長崎総合科学大学
名誉教授



奥野正太郎氏
長崎原爆資料館
学芸員



ブライアン・F・パークガフニ氏
長崎総合科学大学
附属図書館長



11/5(土)

午後2時～午後3時30分

会場 長崎総合科学大学
201講義室 (17号館2F)

主催 長崎総合科学大学 長崎平和文化研究所・附属図書館
連絡先 長崎平和文化研究所 ☎ 095-838-5128 E-Mail peace@NIAS.ac.jp

入場無料

(配布されたチラシ)